

# 国立歴史民俗博物館所蔵唐船反物切本帳について

Research Materials

石田千尋

一  
いわゆる寛永の「鎖国」以降、長崎は唐船とオランダ船を迎え入れる

唯一の公的な国際貿易都市であった。この長崎を窓口として入ってきた人と物と情報とは、時の中央権力である江戸幕府の治下におかれていた。この内、物すなわち輸入品は、後述する如く各種の手續を経た後、日本側の役人である目利によって鑑定・評価が下され、国内市場にもたらされた。輸入反物については、反物目利と呼ばれる役人によって鑑定・評価された。この反物目利および取引にかかわった五ヶ所商人（入札商人）等によって輸入反物の見本裂を貼り込んで作成されたものが「反物切本帳」と称する史料である。「反物切本帳」の類書は、管見の限りにおいても、東京国立博物館をはじめ、長崎歴史文化博物館・長崎市教育委員会・九州大学九州文化史研究所・神戸市立博物館・関西大学図書館・杏雨書屋・京都工芸繊維大学美術工芸資料館・鶴見大学図書館・鶴見大学文学部文化財学科・東京大学史料編纂所・国立歴史民俗博物館等に所蔵されており、その他、個人蔵を含めて各所に散在していると考えられる<sup>1)</sup>。国立歴史民俗博物館には、「天保十一年子二月子壺番割 亥七

番船同八番船端物切本帳并別段商法持渡切本・別段賣端物切本 式冊之内「外破船分壺冊有之」（二冊）と表題を持つ「反物切本帳」が所蔵されている<sup>2)</sup>。

本稿では、まず、この「反物切本帳」が作成された江戸時代後期の長崎での唐船貿易の取引過程を輸入反物を中心に概観し、次にその取引過程内のどの時点で本史料が作成されたかを考察対象に含めて紹介をおこない、その後、本史料に貼り込まれた各裂の取引について現存する取引史料の紹介と共に解明し、最後に各裂の種類や特質、原産地等について考察してみたい。

## 一

先述した如く、いわゆる鎖国下において、唐船はオランダ船と共に唯一の公的な開港場であった長崎港に入津が許されていた。唐船が長崎港に入津すると唐船からは信牌・配銅証文・人名帳・掟書請証文・風説書と共に積荷目録の提出がされた。即日の内にこの積荷目録は長崎奉行所で翻訳され、その写しを糸割符年寄が五ヶ所会所へ持ち渡り入札商人たちに写し取らせた。翌日より丸荷役（荷揚げ）が始まり、（図1参照）

さらに入港後三日目に積荷の品目・数量を確認する精荷役が始まった。  
享和年間（一八〇一～一八〇四）に完成したとされる「華蠻交易明細記」には、

〔朱〕  
一〇「唐船商賣荷物手本取之事」

一端物手本取之事

是者精荷役之節、地合印尺幅等同様之品類分ヶ仕、上中下仕分ヶ、尤印尺幅品違等ハ番立致、手本取分ヶ、尤反数之口者同品之内ニ而茂少々宛高下ハ可在御座ニ付、其類ハ上何端・上ノ中何端と、上中下之内ニ而歩割を以取分ヶ候事<sup>〔3〕</sup>

とあり、精荷役の時点で「反物切本帳」に貼り込まれる見本裂が「取分ヶ」られたと考えられる。

長崎奉行が積荷のサンブルに一通り目を通す形式の手続きである大改（図2参照）（天保十四年以降廃止）が終わると、入札商人への荷見せが始まった。荷見せは原則として新地蔵元でおこなったが、反物については長崎会所でおこなわれた。その後、長崎会所で積荷の元値段を決める値組がおこなわれ、唐人の荷物は一応長崎会所の手に移ったことになる。値組終了後、長崎会所の元方会所に商品売捌きの看板、いわゆる払看板がかかった。そこには入札に付す商品、付きぬ商品（除き物）の品目・反数・斤数、落札代銀の支払期限、代銀の納入場所、支払金銀の割合などが明記されていた。商人はそれを写し取って入札に備えた。入札は、払看板がかかった翌日始まった。入札商人はおおむね数家で組み合っていた。札読みが封書を開き、札を読む時は、三番札までは札読みの上役の者が品名・札主名・入値を読んだ。そして入札の三番札まで長崎会所に保管された。入札終了翌日から新地蔵元で落札商人への荷渡しがおこなわれ、反物はいちいち反数・巻数を調べて渡された<sup>〔4〕</sup>。

三

国立歴史民俗博物館所蔵「天保十一年子壺番割 亥七番船同八番船端物切本帳并別段商法持渡切本・別段賣端物切本 式冊之内」<sup>〔朱〕</sup>「外破船分壺冊有之」<sup>〔一冊〕</sup>（図3～8参照）は、和紙、仮綴にして縦二八・二センチ、横二〇・一センチの縦帳で、二二丁（表紙・裏表紙含む）、一四五裂からなる。本帳は天保十一年（一八四〇）二月に作成されたものであり、表題に「子壺番割」とあることより、子すなわち、天保十一年の一回目の長崎会所と商人との取引にかけられた「亥七番船」と「同八番船」の本売および「別段商法持渡」・「別段賣」の反物の裂を貼り込んだものである。また「式冊之内」と記されていることよりこの「反物切本帳」と対をなす別の「反物切本帳」が存在していたと考えられる。なお、「亥七番船」「同八番船」は、共に南京を出港し、天保十一年正月十日に長崎に入津した唐船である<sup>〔5〕</sup>。また、朱書きで記されている「破船」とは、南京出港の「野母難船」で天保十一年正月二十五日に長崎港に送り届けられた船である。表題よりこの船が積載した反物類の切本帳が他に一冊あることがわかる。国立歴史民俗博物館所蔵の「反物切本帳」はその装丁と各裂の寸法などより、輸入反物の鑑定・評価を役目としていた反物目利によって作成されたものと考えられる。しかし、反物目利名を記していたと思われる表紙左下の部分が破り取られておりそれを知ることができないのが残念である（図3参照）。

本史料は、先述した取引過程をふまえて述べれば、精荷役において見本裂が取られ「子壺番割」の取引用に作成されたものである<sup>〔7〕</sup>。また反物目利のその後の仕事より考えて、この「反物切本帳」は具体的には、まず値組すなわち価格評価のためのものであり、次に、大改下調べ、入札商人への荷見せ、新地蔵元での荷渡しの際に現物と照合するために使用されたと考えられる。さらに他の「反物切本帳」同様この「反物切本

帳」もその残存形態からして後年の参考として作成・保管する意味合いもあつたと推測される<sup>(8)</sup>。

この「反物切本帳」には先述の如く一四五枚の裂が貼り込まれており、その右上に各裂の名称が付されている。この名称と各名称に対する裂の枚数を一覧表にして示すと表1の「品名」「貼付枚数」の欄のようになる。名称を持たない裂（毛の綾織）が一枚あるが、その他は全て名称と裂が一致している。東京国立博物館に所蔵されている一三六冊の「反物切本帳」は「色呉羅服連にわずかに絹物が含まれている例や、羯山の名称が一定していない点を除けば、誤りらしい点を指摘することはできない<sup>(9)</sup>」と小笠原小枝氏が述べられるように反物目利の作成する切本帳は非常に正確なものである。

管見の限り、本帳に貼り込まれている反物の取引に関わる現存史料としては、「端物集」〔天保十一年〕子一番割〔杏雨書屋所蔵〕と「天保十一年子壺番割 切手本帳」〔杏雨書屋所蔵〕（図9・10参照）の二冊を挙げるができる。前者の「端物集」〔天保十一年〕子一番割<sup>(10)</sup>は、五ヶ所商人である村上<sup>(10)</sup>によって作成されたものである。唐船輸入反物は唐人と長崎会所との間で値組取引がおこなわれ、唐人側から日本側に販売される。この後、長崎会所と商人との間で取引がおこなわれるわけであるが、取引前の荷見せの際に商人が輸入反物類に限定して作成を開始したものが「端物集」である。この荷見せの時点で、「端物集」には取引される商品名と数量、長崎会所買入価格、品物の寸法・特色などが記された。さらに、その後におこなわれた長崎会所と商人との取引において入札がおこなわれ、入札上位三番札までの価格と商人名がこの「端物集」に記入された。したがって、この「端物集」によって、各反物の会所買入価格と商人の内の誰が、どの反物をいくらで入札・落札したか知ることができるわけである。

後者の「天保十一年子壺番割 切手本帳」も同じく五ヶ所商人である村

上によって作成されたものである。本史料は、まず、反物目利によって精荷役の際に切り取られた反物の見本裂の一部が帳面に貼付けられ、商人への荷見せが終了するまでに、反物名と取引反数、長崎会所買入価格、反物の寸法・特色などが記され、さらにその後におこなわれた入札において入札上位三番札までの価格と商人名が記入されたものである。見本裂は反物目利作成の「反物切本帳」のものに比べて小さいが、反物目利作成の「反物切本帳」と「端物集」を合わせた取引史料として価値の高いものといえる。

右の二史料と「反物切本帳」との照合により、各貼付裂の取引反数・日本側（長崎会所）買入価格・商人落札価格・落札商人名等を説明することができ、それを表に示すと表1の如くなる（次章では表1にもとづいて各反物の取引について考察する）。また、同時に史料の照合により、「反物切本帳」には貼付されていない唐船七番船・八番船輸入の反物類を説明することができる、それを表に示すと表2の如くなる。

以上のことより、国立歴史民俗博物館所蔵の「反物切本帳」は、天保十一年に長崎港に入津した唐船七・八番船輸入の反物類を、全てではないにしろ名称と共にその現物を確認することができる価値の高い実物史料といえることができるのである。

#### 四

ここでは、前章において紹介した国立歴史民俗博物館所蔵の「反物切本帳」に貼り込まれている裂の種類や特質、原産地、さらに日本においてどれくらいの価格で取引されたか等、毛織物・絹織物・綿織物・交織の順にそれぞれの名称を上げて考察していきたい。

#### 〈毛織物〉

#### 大羅紗

羅紗はポルトガル語の *malha* の転じた語<sup>(11)</sup>。近世の初頭にポルトガル船

表1 国立歴史民俗博物館所蔵(天保十一年)「反物切本帳」裂名称・貼付枚数  
および取引史料よりみた各取引反数・会所買入価格・落札価格・落札商人名

品名	貼付枚数	取引反数	会所買入価格(銀高)	落札価格(銀高)	落札商人
亥七番船					
紅大羅紗	1	1 端	91 匁 5 分 / 間	169 匁 / 間	山本ヤ
青茶色同	1	4 端	94 匁 5 分 / 間	159 匁 1 分 / 間	川内ヤ
薄萌黄色同	1	2 反	81 匁 5 分 / 間	141 匁 / 間	升 ヤ
黄同	1	1 端	81 匁 5 分 / 間	137 匁 2 分 / 間	高田ヤ
黒同	1	5 端	81 匁 5 分 / 間	155 匁 / 間	升 ヤ
		(2 間 2 合 5 勺家中)			
桃色同	1	1 端	81 匁 5 分 / 間	129 匁 8 分 / 間	升 ヤ
鳶色同	1	1 端	81 匁 5 分 / 間	144 匁 9 分 / 間	村 藤
花色同	1	1 端	81 匁 5 分 / 間	138 匁 / 間	枅 ヤ
桔梗色同	1	1 端	81 匁 5 分 / 間	131 匁 8 分 / 間	松本ヤ
紫鳶色同	1	2 端	81 匁 5 分 / 間	135 匁 3 分 / 間	村 藤
壺番青茶色スタメン	1	23 端	42 匁 3 分 / 間	150 匁 / 間	升 ヤ
同	1				
同	1				
同	1				
式番同 巾袂	1	1 端	38 匁 / 間	135 匁 / 間	エサキ
千才茶色呉羅服連	1	1 端	21 匁 / 間	93 匁 / 間	安田ヤ
赤鳶色同	1	1 端	23 匁 / 間	53 匁 9 分 / 間	升 屋
紅藤色同	1	5 端	23 匁 / 間	67 匁 1 分 / 間	村 藤
青茶色同	3	15 端	26 匁 / 間	58 匁 9 分 / 間	升 ヤ
花色同	1	2 端	23 匁 / 間	70 匁 / 間	山 中
同	1				
紫色同	1	3 端ト2 切	23 匁 / 間	59 匁 9 分 4 厘 / 間	安田ヤ
同	1				
紅へるへとわん	1	5 端	172 匁 / 反	568 匁 / 反	升 ヤ
黄同	1	5 端	167 匁 / 反	392 匁 4 分 / 反	村 太
白同	1	5 端	135 匁 / 反	383 匁 / 反	エサキ
壺番青茶色同	1	142 端 (10 反開)	171 匁 2 分 (10 反) / 反 160 匁 (遇上) / 反	448 匁 / 反	山本ヤ
同	1				
同	1				
式番青茶色同	1	12 端	152 匁 / 反	425 匁 / 反	ふじヤ
同	1				
壺番續色兎羅綿	1	4 端 (3 反家中)	45 匁 / 反	128 匁 7 分 / 間	ノ口ヤ
同 鼠色	1				
同 濃鼠色	1				
同 赤	1	14 端	33 匁 / 反	135 匁 5 分 / 間	江 崎
同 紫色	1				
同 同	1				
同 青茶色	1				
同 黄	1				
同 黄柄茶色	1				
幅廣上白金巾	2	40 端	86 匁 5 分 / 反	291 匁 1 分 / 反	大鳥ヤ
幅廣花色巾	1	160 反	31 匁 / 反	96 匁 3 分 / 反	村藤・村太・松本ヤ
同	1				
色絹紬 濃鼠色	4	154 反 (12 反家中)	27 匁 / 反	64 匁 6 分 / 反	大鳥屋
上絹紬	1	33 端	27 匁 5 分 / 反	65 匁 1 分 / 反	ふじヤ
同	1				
同	1				
同	1				

品名	貼付枚数	取引反数	会所買入価格(銀高)	落札価格(銀高)	落札商人
別段商法持渡					
幅廣如源黒繻子	1	20反(2反家中)	銀札280匁/反	449匁6分/反	中の
同	1				
如源黒繻子	1	191反(12反家中)	銀札280匁/反	424匁 /反	山本ヤ
同	1				
黒繻子	1	10端	銀札250匁/反	338匁 /反	ノ口ヤ
同	1				
花色へるへとわん	1	3端	132匁5分(本方へ組入)/反	436匁 /反	高田ヤ
い黒同	1	255反	銀札255匁/反	431匁 /反	村藤
い同	1				
ろ同	1	5端	銀札235匁/反	309匁3分/反	ノ口ヤ
ろ同	1				
上絹紬	4	241端(36反家中)	30匁7分(本方へ組入)/反	71匁4分/反	大坂ヤ
同七番船別段賣					
新織弁柄寫	1	< 35反 >	< - >	< - >	< - >
同	1				
同	1				
同	1				
同	1				
色紋綿紬 紅	1	< 10反 >	< - >	< 12匁9分/反 >	< エサキ >
花色	1				
萌黄色	1				
茶色	1				
桔梗色	1				
沓番白木綿	1	< 31反 >	< - >	< 7匁6分/反 >	< 山本屋 >
沓番形附木綿	1	< 1反 >	< - >	< 28匁6分/反 >	< 山本 >
(裂)※1	1				
同八番船					
紅大羅紗	1	2端	91匁5分/間	170匁 /間	エサキ
黄同	1	2反	81匁5分/間	136匁5分/間	名古ヤ
青茶色同	1	4端(1間5合家中)	94匁5分/間	160匁 /間	エサキ
同	1				
萌黄色同	1	1端	81匁5分/間	145匁 /間	江崎
鶯色同	1	1端(1間5合家中)	81匁5分/間	146匁 /間	エサキ
桃色同	1	1端	81匁5分/間	130匁1分/間	大坂ヤ
黒同	1	3端	81匁5分/間	165匁1分/間	江崎
沓番花色同	1	1端	81匁5分/間	137匁8分/間	富ヤ
式番花色同	1	1端	81匁5分/間	152匁 /間	名古ヤ
茶鼠色同	1	1端	81匁5分/間	141匁3分/間	村太
鼠色同	1	1端	81匁5分/間	128匁1分/間	村太
薄萌黄色同	1	1端(1間7合家中)	81匁5分/間	141匁 /間	エサキ
青茶色スタメン	1	3端	44匁 /間	165匁 /間	松本屋
同	1				
沓番紅呉羅服連	1	1端	24匁 /間	63匁6分/間	安田ヤ
式番同	1	2端	22匁5分/間	50匁 /間	大鳥ヤ
黄同	1	1端	20匁7分/間	53匁7分/間	安田ヤ
赤膚色同	1	1端	23匁 /間	53匁2分/間	升ヤ
淺黄色同	1	1端(4間3合家中)	23匁 /間	100匁 /間	安田ヤ

品名	貼付枚数	取引反数	会所買入価格(銀高)	落札価格(銀高)	落札商人
桃色同	1	1 端	23 匁 / 間	58 匁 2 分 / 間	村 藤
桔梗色同	1	4 端	20 匁 7 分 / 間	50 匁 8 分 / 間	大鳥ヤ
同	1	6 端 (2 間 2 合 5 匁家中)	23 匁 / 間	59 匁 6 分 / 間	村 藤
紫色同	1				
同	1				
黒同	1	3 端	22 匁 / 間	72 匁 1 分 / 間	河内ヤ
同	1				
沓番花色同	1	11 反 (26 間 4 合家中)	23 匁 / 間	67 匁 9 分 / 間	中 の
同	1				
同	1				
同	1				
式番花色同	1	13 端	20 匁 7 分 / 間	33 匁 9 分 / 間	升 ヤ
同	1				
同	1				
沓番濃桔梗色同	1	2 端	23 匁 / 間	56 匁 3 分 / 間	入来ヤ
同	1				
式番同	1	3 端	20 匁 7 分 / 間	33 匁 9 分 / 間	升 ヤ
同	1				
黒鶯色同	1	1 反	20 匁 7 分 / 間	32 匁 8 分 / 間	安田ヤ
濃花色同	1				
紅へるへとわん	1	2 端 (1 反家中)	20 匁 7 分 / 間	33 匁 / 間	升 ヤ
同	1				
黄同	1	1 端	172 匁 / 反	586 匁 / 反	長 岡
青茶色同	1	1 端	167 匁 / 反	398 匁 1 分 / 反	江サキ
同	1	5 端	165 匁 7 分 5 厘 / 反	451 匁 / 反	永見ヤ
花色同	1	12 反	132 匁 5 分 / 反	436 匁 3 分 / 反	村 藤
同	1				
い黒へるへとわん	2	5 端	135 匁 / 反	471 匁 / 反	長 岡
ろ同	1	1 端	122 匁 5 分 / 反	418 匁 / 反	ノ口ヤ
幅廣上白金巾	1	56 反	86 匁 5 分 / 反	290 匁 / 反	村 藤
同	1				
同	1				
御請持渡 大紅縮綿	1	[不記]	[不記]	[不記]	[不記]
同八番船別段賣 黒羊毛織	1	< 26 反 >	< - >	< 39 匁 >	< 大鳥ヤ >
形附嶋金巾	2	< い 5 切 > (3 切家中)	< - >	< 45 匁 3 分 >	< 山 田 >
		< ろ 8 切 > (1 切家中)	< - >	< 25 匁 >	< エサキ >
い蠟引更紗	1	< 3 反 >	< - >	< - >	< - >
同	1	< 7 切 >	< - >	< - >	< - >
ろ同	1				
同	1				
同	1				
沓番形附木綿	1	< 1 反 >	< - >	< - >	< - >

註 ・※1には名称を持たない裂(毛の綾織)が貼り付けられている。  
 出典 ・品名・貼付枚数の欄は「天保十一年子二月 子沓番割 亥七番船同八番船端物切本帳并別段商法持渡切本・別段賣端物切本 式冊之内「外破船分沓冊有之」(国立歴史民俗博物館所蔵)。  
 ・取引反数・会所買入価格・落札価格・落札商人の欄は、「天保十一子沓番割 切手本帳」(杏雨書屋所蔵)。  
 なお、< >内は、「端物集」[天保十一年]子一番割(杏雨書屋所蔵)。

表2 国立歴史民俗博物館所蔵(天保十一年)「反物切本帳」に掲載されていない  
天保十一年子壺番割の亥七番船・八番船の反物類

品名	取引反数	品名	取引反数
亥七番船		亥八番船	
壺番續白兎呂綿	150 端	壺番續白兎呂綿	125 反
貳番同	6 端	貳番同	5 反
混入上けん中	26 端	絹紬	464 反
壺番けん中	72 端	壺番毛せん	1,800 枚
貳番同	380 端	貳番同	600 枚
カアサ地尺長さらさ	34 端	碁盤同	102 枚
もうせん	2,400 枚	續碁盤同	130 枚
碁はん同	230 枚	花毛せん	15 枚
色小毛せん	20 枚	屑紛糸	3 俵 (250 斤 5 合)
屑紛糸	12 俵 (1,116 斤)	小幅色毛セン	4 枚
尺長上皿紗	14 端	亥八番船別段	
一番金笹縁リ	6 丈 3 尺	幅廣如源黒縹子	2 反
二番金笹縁リ	2 丈 6 尺	如源黒縹子	4 端
三番金笹縁リ	2 丈 6 尺	幅廣黒縹子	20 反
四番金笹縁リ	2 丈 6 尺	黒縹子	64 端
亥七番船別段		白畦布	1 反
二番紅布	30 反	一番かふり皿紗	9 切
赤大もうせん	5 枚	二番かふり皿紗	84 切
花毛せん	4 枚	花毛せん	20 枚
保呂	2 枚	一番綿丹通	1,800 切
一番綿丹通	158 切	二番綿丹通	9 切
二番綿丹通	50 切	三番綿丹通	87 切
二番形付木綿	452 反	二番形付木綿	30 反
一番嶋木綿	1,374 反	一番嶋木綿	1,146 反
二番嶋木綿	15 反	二番嶋木綿	82 反
白畝木綿	13 反	白木綿	50 反
二番白木綿	73 反	白羊毛織	80 反
白羊毛織	90 反	綿	5,400 斤 (90 丸)
綿	2,880 斤 (32 丸)		

出典 ・「天保十一子壺番割 切手本帳」・「端物集」[天保十一年]子一番割(杏雨書屋所蔵)。

が持ち渡った *trass* をラシヤと呼んだのがはじまりである。羊毛で地が厚く、織(平織)の組織がわからないほど毛羽立たせた毛織物(図4参照)。原産地はヨーロッパ。長崎オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ Hendrik Doeff は、「長崎オランダ商館日記」の一八〇九年(文化六)九月十八日の条で、

年番通詞が私のところに来た。そして私に、奉行の命令において、中国人たちが今年運んで来た毛織物の見本を「見せた」。それはたしかにしなやかさと質の良さにおいてわれわれのものをしのいでいた。奉行は私に、中国人たちは誰からこの大羅紗を入手したのかと尋ねさせた。彼らは恐らくそれを広東においてイギリス人より買いためたものと思われる、と答えた。<sup>(12)</sup>

と記していることや、一八一一年(文化八)十一月二十四日の条で、

会所には、中国人による輸入品は、胡椒一〇カティとイギリス産へるへとあん二反以上の残りがないたためである、とのことである。<sup>(13)</sup>

(傍線は筆者が記した)と記していることなどから、唐船輸入の毛織物はイギリス産である可能性が高い。黒・鳶・桔梗・青茶・青・鼠・茶・黄色等さまざまな色のあるものがあがるが、緋色の大羅紗は特に狸々緋と呼ばれることがある。(国立歴史民俗博物館所蔵の「反物切本帳」では「紅大羅紗」と表記されている。)狸々緋はサボテンの寄生虫であるコチニール(えんじ虫)の雌を乾燥粉末にして染色したものであり、一ポンドの染料を得るのに約七万匹のコチニールが必要とされた。<sup>(14)</sup> 大羅紗の「大」とは小羅紗の「小」に対する語で丈の長いことを表すようである。しかし、大羅紗と小羅紗の典型的な違いは織にあり、大羅紗は平織であるが、

小羅紗は経糸二本ごとに緯糸を通した三枚綾織である。なお、小羅紗は国立歴史民俗博物館所蔵の「反物切本帳」にはない。

表1に示した如く、唐側は「大羅紗」を日本(長崎会所)に一間に付、銀八一匁五分〜九四匁五分(以下、本稿では価格単位の「銀」表記は省略する)で販売している。その後、長崎会所で入札に掛けられ、一二八匁一分〜一七〇匁で日本商人(五ヶ所商人)に購入されている。

#### スタメン

スタメンは、オランダ貿易品目の名称 *samet* (ten) の音訳である。*stanet* はラテン語の *stamen* (経糸) に由来する語である。また、*stanet* (ten) は別名 *zeelboek* (漉布) と呼ばれた。<sup>(15)</sup> 羅紗に比べて薄手で毛足が短くやや粗い平織の毛織物(図5参照)。原産地はイギリスの可能性が高い。

表1に示した如く、唐側は「スタメン」を日本(長崎会所)に一間に付、三八匁〜四四匁で販売している。その後、長崎会所で入札に掛けられ、一三五匁〜一六五匁で日本商人(五ヶ所商人)に購入されている。

#### 呉羅服連

呉羅服連は、オランダ貿易品目の名称 *grof* *grein* の音訳である。*grof* は「粗い」、*grein* は「表面のざらついた」という意。経緯の糸込みが二二本前後(一センチ間)のかなり均一な平織の起毛のない毛織物(図5参照)。原産地はイギリスの可能性が高い。

表1に示した如く、唐側は「呉羅服連」を日本(長崎会所)に一間に付、二〇匁七分〜二六匁で販売している。その後、長崎会所で入札に掛けられ、三二匁八分〜一〇〇匁で日本商人(五ヶ所商人)に購入されている。

#### へるへとわん

へるへとわんは、オランダ貿易品目の名称 *perpetuan* の音訳である。*perpetuan* は字義上は「永久の」の意。もともとポルトガルで生まれた織物。<sup>(16)</sup> ざっくりとした綾目で粗い起毛の毛織物。原産地はイギリスの



可能性が高い。

表1に示した如く、唐側は「へるへとわん」を日本（長崎会所）に一  
反に付、一二二匁五分〜二五五匁で販売している。その後、長崎会所で  
入札に掛けられ、三〇九匁三分〜五八六匁で日本商人（五ヶ所商人）に  
購入されている。

兎羅綿

兎羅とろとは梵語の *toro* の音訳で、綿花の意。もともとは綿糸にウサギ  
の毛をまじえて織ったもの。<sup>(17)</sup>「反物切本帳」の裂は、へるへとわんに比  
べて起毛が少なく糸は細いが、あまり密ではない綾織の毛織物（図6参  
照）。なお、「續」とは二反つづきの意である。

表1に示した如く、唐側は「老番續色兎羅綿」を日本（長崎会所）に  
一反に付、三三匁〜四五匁で販売している。その後、長崎会所で入札に  
掛けられ、一二八匁七分〜一三五匁五分で日本商人（五ヶ所商人）に購  
入されている。

羊毛織

粗い綾目で輪奈織を毛切れにした毛織物。

表1に示した如く、「羊毛織」は三九匁で日本商人（五ヶ所商人）に購  
入されているが、それが一間か一反かは未詳である。

絹織物

絹細

サク蚕糸を使用した薄地の平織物。各種の色物があるが、一般に鈍い  
色合いのものが多く（図7参照）。

表1に示した如く、唐側は「色絹細」「上絹細」を日本（長崎会所）  
に一反に付、二七匁〜三〇匁七分で販売している。その後、長崎会所で  
入札に掛けられ、六四匁六分〜七一匁四分で日本商人（五ヶ所商人）に  
購入されている。

縹子

縹子は経糸と緯糸の交錯点を一定の間隔に配置した経糸または緯糸の  
浮きが多い組織。表面は平滑で強い光沢をもつ。経緯糸に本絹の練糸を  
使用したものを本縹子といい、その他糸の種類によって、綿縹子、毛縹子、  
縹子羽二重などさまざまな種類がある。「反物切本帳」の裂は絹の縹子。  
原産地は中国。なお、「幅廣」とは通常の反物の幅より広いことを意味  
する。

表1に示した如く、唐側は「幅廣縹子」「縹子」を日本（長崎会所）  
に一反に付、二五〇匁〜二八〇匁で販売している。その後、長崎会所で  
入札に掛けられ、三三八匁〜四四九匁六分で日本商人（五ヶ所商人）に  
購入されている。

縮綿

経糸に撚りのない生糸、緯糸に右撚りと左撚りの強撚糸を交互に使っ  
て平織にし、布面に細かな皺を出した絹織物。原産地は中国。

取引史料にこの反物については、名称をはじめとして一切記されてい  
ない。

金巾

金巾

金巾はポルトガル語 *canquim* の音訳である。<sup>(18)</sup> 下記の木綿よりも経緯  
の糸込みが密で、布面の平滑な光沢のある平織の綿布。よく晒した平織  
の白生地「白金巾」と、後染した色物「花色金巾」が貼付されている（図  
6参照）。また、金巾に捺染で縹模様を施したものを「形附嶋金巾」と  
称している。原産地は中国。

表1に示した如く、唐側は「幅廣上白金巾」を日本（長崎会所）に一  
反に付、八六匁五分で販売している。その後、長崎会所で入札に掛けられ、  
二九〇匁〜二九二匁一分で日本商人（五ヶ所商人）に購入されている。

## 木綿

未晒して厚手の平織綿布。金巾に比べて経緯の糸込みが粗い。また、木綿地に捺染で文様を施したものを「形附木綿」と称している(図8参照)。原産地は中国。

表1に示した如く、「壹番白木綿」は一反に付、七匁六分、「壹番形附木綿」は一反に付、二八匁六分で、それぞれ日本商人(五ヶ所商人)に購入されている。

## 更紗

更紗は綿布を花鳥・人物・幾何学文様等、種々様々な模様染めわけたもの。更紗は本来インドで生まれた染織と考えられるが、その技法がヨーロッパに伝わり、そこで生まれた更紗(ヨーロッパ更紗)がある。このヨーロッパ更紗にはインド更紗とは違ったヨーロッパ独自の意匠によってアリザンレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄や幾何学文様等のあでやかなプリント更紗と、意匠においてインド更紗を模倣した単色や二色のプリント更紗がある。<sup>(1)</sup>「反物切本帳」の更紗は、全てプリントによるヨーロッパ更紗である。なお、日本側商品名の「蠟引」とは、蠟防染によって作成された跡の蠟が残っていることより名付けられたものと考えられる。

取引に関しては、取引史料に商品名・反数は記されているが、取引価格・落札商人の記事はない。

## 〈文織〉

### 弁柄寫

「弁柄寫」は経に絹糸を用いた縞柄の綿糸と絹糸の交織である(図7参照)。なお「新織」とは従来輸入されたものとは違うニュータイプ<sup>(2)</sup>の染織を意味する。

取引に関しては、取引史料に商品名・反数は記されているが、取引価格・落札商人の記事はない。

## 紋綿紬

経糸に撚りのない生糸、緯糸に綿糸を用い、平織の地に四枚綾で文様を織り出した交織(図8参照)。原産地は中国。

表1に示した如く、「紋綿紬」は一反に付、一二匁九分で、日本商人(五ヶ所商人)に購入されている。

## 五

本稿において紹介した国立歴史民俗博物館所蔵「天保十一年子二月子壱番割 亥七番船同八番船端物切本帳并別段商法持渡切本・別段賣端物切本 式冊之内」<sup>(米)</sup>「外破船分老冊有之」(一冊)は、長崎貿易(唐船貿易)において、実際の取引の中で作成された原史料であり、反物目利が輸入反物を鑑定した後、後の価格評価・覚えのために作成した「手本帳」と称すべきものである。本史料は、作成年月を明記の上、現物としての裂と名称とが一体となっていることより、その史料的价值は非常に高いといえよう。

本史料は、近世にもたらされた反物すべてを含んでいるわけではないが、一九世紀前半に唐船が日本に輸入した外来の染織を明らかにする掛け替えのない実証史料といえることができる。

## 註

(1) 「反物切本帳」をあつかった研究としては、小笠原小枝・石田千尋「紅毛船・唐船・琉球産物 端物切本帳について」(『MUSEUM』四五六、平成元年)の他、拙稿「東京大学史料編纂所蔵唐船載反物切本帳について」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第八号、平成一〇年)、近世日本と国際的商品流通の展開―嘉永二年、長崎貿易における染織輸入―(箭内健次編『国際社会の形成と近世日本』日本図書センター、平成一〇年)、「長崎貿易における染織輸入―文政五年(一八二二)を中心として―」(『一滴』第七号、平成一一年)、「十八世紀の蘭船毛織物輸入と切本―「從享保二酉年至寛政七卯年 紅毛持渡 小羅紗類」の紹介を兼ねて―」(『鶴見大学紀要』第三八号第四部、平成一三年)・拙著「日蘭貿易の史的研究」

(吉川弘文館、平成一六年)等があるので参照されたい。

- (2) 本史料の存在については、既に奥村萬龜子氏によって「渡来裂の軌跡—とろめんの場合—」(『京都府立大学学術報告 人間環境学・農学』第四九号、平成九年)において紹介されているが、それは、写真掲載による「とろめん」についてのみであり、本史料に関する書誌的考察はまだおこなわれていない。

- (3) 『華蠻交易明細記』(『長崎県史』史料編第四、吉川弘文館、昭和四〇年)三九一～三九二頁参照。

- (4) 唐船貿易の取引過程については主として山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』(吉川弘文館、昭和四七年)二九七～三〇九頁を参照し、中村質『近世長崎貿易史の研究』(吉川弘文館、昭和六三年)四六一～四六三頁で補った。

- (5) 大庭脩編『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳』(関西大学東西学術研究所、昭和四九年)一四頁参照。なお、天保十年(亥)あつかいの他の長崎入津唐船の番立と入港日は次の通りである。

- 一番船(寧波) 天保十年六月二十五日
- 二番船(南京) 天保十年六月二十五日
- 三番船(南京) 天保十年六月二十五日
- 四番船(寧波) 天保十年六月二十六日
- 五番船(南京) 天保十年二月二十八日
- 六番船(寧波) 天保十一年正月八日
- 野母難船(南京) 天保十一年正月二十五日送り届

- (6) (5)参照。

- (7) なお、天保十一年の「子壺番割」は「端物集」(天保十一年)「子一番割」(杏雨書屋所蔵)によると次の取引名目と商品桁数であった。

- 亥五番船本賣 八十壺桁
- 同六番船同断 八十八桁
- 同七番船同断 八十六桁
- 同八番船同断 八十壺桁
- 亥五番船別段賣 百五十拾六桁
- 同六番船同断 百七十桁
- 同七番船同断 百十七桁
- 同八番船同断 百廿六桁
- 野母難船本賣荷物 六十九桁
- 亥七番舟本賣荷物追組入 三桁
- 同五番舟追御買上 一桁
- 同六番舟同断 七桁
- 同七番舟同断 十桁

同八番舟同断 四桁

舟々會所請込物 十四桁

野母難船荷物別段 廿四桁

舟々別段賣追組入 廿一桁

メ千五十八桁

また、この天保十一年の一番割の本賣の入札は、二月二十九日より三月十日までおこなわれ、別段賣の入札は、三月十二日より十五日までおこなわれた。

- (8) 拙著『日蘭貿易の史的研究』(吉川弘文館、平成一六年)一一〇頁参照。

- (9) 小笠原小枝・石田千尋「紅毛船・唐船・琉球産物 端物切本帳について」(『MUSEUM』四五六、平成元年)一七頁参照。

- (10) 村上家は、江戸時代、長崎の本博多町に店舗をかまえ、貿易業と両替業ならびに銀貸しを兼営していた家である。村上家の文書は昭和初年頃まで同家に一括所蔵されていたようであるが、現在は長崎歴史文化博物館・長崎大学附属図書館経済学部分館・神戸市立博物館・大阪商工会議所商工図書館・杏雨書屋・個人などに分蔵されている。村上家文書は近世の貿易文書としてもっともまとまった史料群の一つであり、また近世の両替商、輸入工芸品などの研究にとっても貴重な基礎資料といわれている。(神戸市立博物館編『神戸市立博物館蔵品目録』美術の部一一、平成六年、二頁参照)

- (11) 『日本国語大辞典』第二版第一三卷(小学館、平成一四年)七七三頁参照。岡田章雄「羅紗」(『南蛮随想』岡田章雄著作集VI、思文閣出版、昭和五九年)四二～四三頁参照。

- (12) 日蘭学会編『長崎オランダ商館日記』三(雄松堂出版、平成三年)二二二頁参照。

- (13) 同右、五一六〇頁参照。

- (14) 角山幸洋『日本染織発達史』(田畑書店、昭和四九年)八一頁参照。

- (15) Pieter van Dam, *Beschrijvinge van de Oostindische Compagnie, 2de boek, deel I, s-Gravenhage, 1927, p.834, stanetten.*

- (16) Pieter van Dam, *op.cit. Iste boek, deel I, p.744, perpetuan.*

- (17) 『日本国語大辞典』第二版第九卷(小学館、平成一三年)一四五四頁参照。

- (18) 同右、第二版第三卷、八六一頁参照。

- (19) 註(8)参照、一八二～一九〇頁。

(鶴見大学文学部、国立歴史民俗博物館プロジェクト研究員)  
(二〇〇六年三月二三日受理、二〇〇六年一〇月二七日審査終了)

図1 唐船荷揚(「唐船來舶図卷」長崎歴史文化博物館所蔵)

図2 唐船貨物大改(「在長崎日清貿易絵巻」松浦史料博物館所蔵)

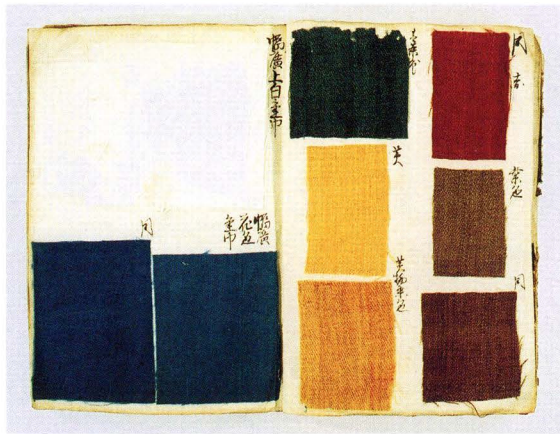


図6 金巾・兎羅綿 (右頁)



図3 表紙

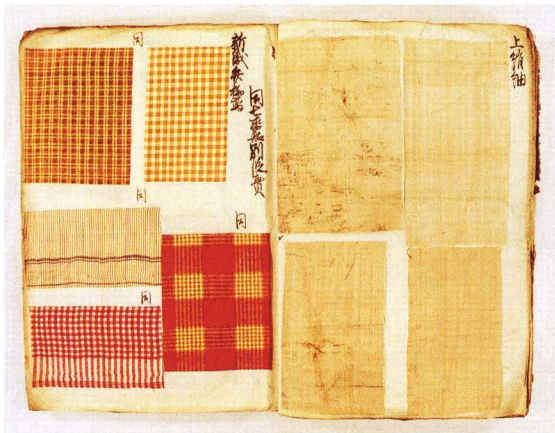


図7 弁柄烏・絹紬

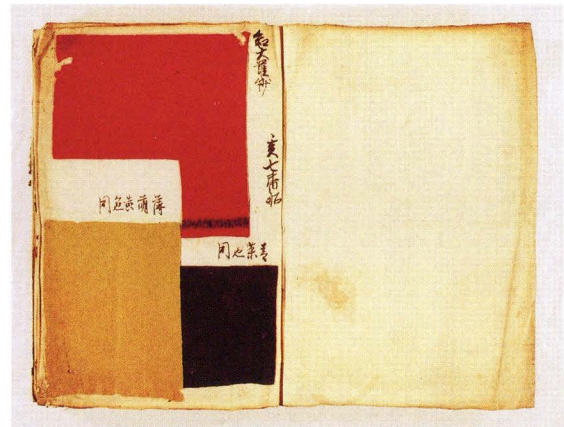


図4 大羅紗

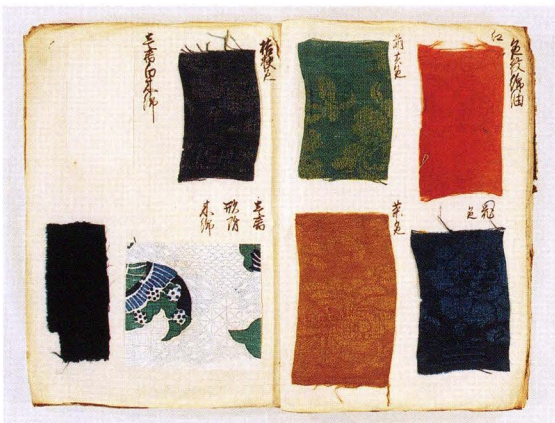


図8 木綿・形附木綿・紋綿紬

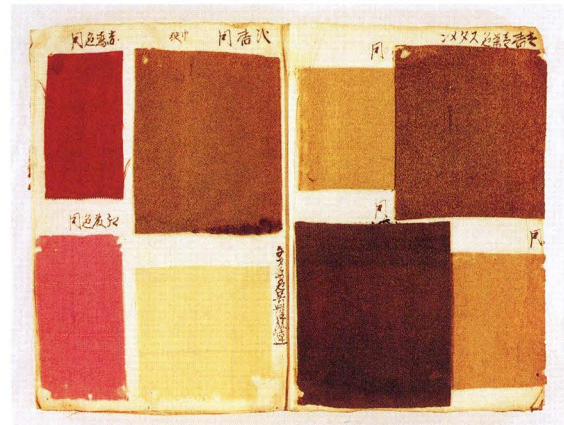


図5 呉羅服連・スタメン

図3~8 「天保十一年子二月 子壺番割 亥七番船同八番船端物切本帳并別段商法持渡切本・別段賣端物切本 式冊之内 「外破船分壺冊有之」(国立歴史民俗博物館所蔵)

図10 大羅紗

図9 表紙

図9・10 「天保十一子壺番割 切手本帳」(杏雨書屋所蔵)